

Botchan Chapter 10 (Natsume Sōseki)

祝勝会しゅくしょうかいで学校がっこうはお休みやすだ。練兵場れんべいばで式しきがあるというので、狸たぬきは生徒せいとを引率いんそつして参列さんれつしなくてはならない。おれも職員しょくいんの一人ひとりとしていっしょにくっついて行くんだ。町まちへ出ると目の丸まるだらけで、まぼしいくらいである。学校の生徒はっぴやくにんは八百人もあるのだから、体操たいそうの教師きょうしが隊伍たいごを整ととのえて、一組いちくみ一組あいだの間すこを少しずつ明あけて、それへ職員ふたりが一人か二人ずつ監督かんとくとして割り込む仕掛けわこしかである。仕掛けしかけだけはすこぶる巧妙こうみょうなものだが、実際じっさいはすこぶる不手際ふてぎわである。生徒こどもは小供うえの上に、生意気なまいきで、規律きりつを破やぶらなくっては生徒たいめんの体面おもにかかわると思おもってるやつらだから、職員いくたりが幾人なんついて行なったって何やくの役に立たつもんか。命令めいれいも下くださないのに勝手かってな軍歌ぐんかをうたったり、軍歌わけをやめるとワーときと訳こえもないのに関あの声ろくにんを揚げたり、まるで浪人らうにんが町内ちやうないをねりあるいてるようなものだ。軍歌ときも関ときの声なにも揚しゃべげない時はがやがや何か喋舌しゃべてる。喋舌あらないでも歩にほんじんけそうくちなものだが、日本人さきはみな口うまから先さきへ生うまれるのだから、いくら小言こごとを云いったって聞ききっこない。喋舌しゃべるのもただ喋舌しゃべるのではない、教師きょうしのわる口くちを喋舌しゃべるんだから、下等かとうだ。おれは宿直しゅくちよくじけん事件じやざいで生徒しやざいを謝罪しゃざいさせて、まあこれならよかろうと思おもっていた。ところが実際おおちがは大違げしゅくいである。下宿げしゅくの婆ばあさんの言葉ことばを借かりて云まえば、正まさに大違ちがいの勘五郎かんごろうである。生徒しんがあやまったのは心しんから後悔こうかいしてあやまったのではない。ただ校長こうちやうから、命令こうちやうされて、形式的けいしきてきに頭あたまを下さげたのである。商人しょうにんが頭ずるばかり下ことげて、狡あやい事まをやめないのと一般いっぱんで生徒しんも謝罪しゃざいだけはするが、いたずらは決けつしてやめるものでない。よく考かんがえてみると世よの中なかはみんなこの生徒せいりつのようなものから成せい立りつしているかも知しれない。人があやまったり詫わびたりするのを、真面目まじめに受うけて勘弁かんべんするのは正直しょうじき過ぎる馬鹿ばかと云いうんだらう。あやまるのも仮かりにあやまるので、勘弁かんべんするのも仮かりに勘弁かんべんするのだと思おもってれば差さし支つかえない。もし本ほん当とうにあやまらせる気きなら、本ほん当とうに後悔こうかいするまで叩たたきつけなくてははいけない。

おれが組くみと組あいだの間いにはいって行くと、天麩羅てんぷらだの、団子だんごだの、と云いう声こえが絶たえずする。しかも大勢おおぜいだから、誰だれが云いうのわかか分ことらない。よし分ことつてもおれの事ことを天麩羅てんぷらと云いったんじやありません、団子だんごと申まうしたのせんせいじゃありません、それは先生せんせいが神しん經けい衰すい弱じやくだから、ひがんで、そう聞きくんだぐらい云いうに極きまってる。こんな卑劣ひれつな根こんじやう性ほうけんじだいは封建時代いくせいから、養成とちしたこの土地とちの習しゅう慣かんなんだから、いくら云いって聞きかしたって、教おしえてやったって、到底とうてい直なりっこない。こんな土地いちねんに一年いも居いると、潔白けつぱくなおれも、この真似まねをしなしなければならなく、なるかも知しれない。

むこ　　い　　ぬ　　しゅだん　　かお　　よご　　ほう　　ちょぼいち
向うでうまく言い抜けられるような手段で、おれの顔を汚すのを抛っておく、樗蒲一はな
い。向こうが人ならおれも人だ。生徒だって、子供だって、ずう体はおれより大きいや。だから
けいばつ　　なに　　へんぼう　　ざり
ら刑罰として何か返報をしてやらなくっては義理がわるい。ところがこっちから返報をする
じぶん　　じんじょう　　さかねじ　　く　　きさま
時分に尋常の手段で行くと、向うから逆振を食わして来る。貴様がわるいからだと言と、
しょて　　に　　みち　　つく　　とうとう　　べん　　た　　じぶん　　ほう
初手から逃げ路が作ってある事だから滔々と弁じ立てる。弁じ立てておいて、自分の方を
おもてむ　　りっぱ　　ひ　　こうげき
表向きだけ立派にしてそれからこっちの非を攻撃する。もともと返報にした事だから、こちら
の弁護は向うの非が挙がらない上は弁護にならない。つまりは向うから手を出しておいて、
せけんてい　　しか　　けんか　　みな　　たいへん　　ふりえき
世間体はこっちが仕掛けた喧嘩のように、見倣されてしまう。大変な不利益だ。それなら向う
ぐうたらどうじ　　き　　こ　　ぞうちょう
のやるなり、愚迂多良童子を極め込んでいれば、向うはますます増長するばかり、大きく云
よ　　なか　　しかた　　ひっぽう　　もち　　つら
えば世の中のためにならない。そこで仕方がないから、こっちも向うの筆法を用いて捕まえ
て　　つ　　えど　　こ
られないで、手の付けようのない返報をしなくてはならなくなる。そうなのは江戸っ子も
だめ　　いじょう　　にんげん　　なん
駄目だ。駄目だが一年もこうやられる以上は、おれも人間だから駄目でも何でもそうならな
しまつ　　はや　　とうきょう　　かえ　　きよ　　かぎ
くっちゃ始末がつかない。どうしても早く東京へ帰って清といっしょになるに限る。こんな
いなか　　だらく　　しんぶんはいたつ
田舎に居るのは墮落しに来ているようなものだ。新聞配達をしたって、ここまで墮落するよりは
はました。

かんが　　つ　　なん　　せんぼう　　きゅう　　さわ　　だ　　どうじ　　れつ
こう考えて、いやいや、附いてくると、何だか先鋒が急にながやがや騒ぎ出した。同時に列
はぴたりと留まる。変だから、列を右へはずして、向うを見ると、大手町を突き当って薬師町
ま　　かど　　ところ　　い　　づま　　お　　かえ　　も　　あ
へ曲がる角の所で、行き詰ったざり、押し返したり、押し返されたりして揉み合っている。
ぜんぼう　　しず　　こえ　　か　　き　　たいそうきょうし　　き　　ちゅうがっこう
前方から静かに静かにと声を潤らして来た体操教師に何ですと聞くと、曲り角で中学校と
しはながっこう　　しょうとつ　　い
師範学校が衝突したんだと云う。

けんか　　いぬ　　さる　　なか
中学と師範とはどこの県下でも犬と猿のように仲がわるいそうだ。なぜだかわからないが、ま
きふう　　あ　　なに　　けんか　　おおかたせま　　いなか　　たいくつ　　ひまつぶ
るで気風が合わない。何かあると喧嘩をする。大方狭い田舎で退屈だから、暇潰しにやる
しごと　　す　　ほう　　おもしろはんぶん　　か　　だ　　い
仕事なんだろう。おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、面白半分に駆け出して行っ
た。するとまえ　　れんちゅう　　ちほうぜい　　くせ　　ひ　　こ　　ど　　な　　うし
た。すると前の方にいる連中は、しきりに何だ地方税の癖に、引き込めと、怒鳴ってる。後
ろからはお　　お　　こえ　　だ　　じゃま　　せいと　　あいだ　　ぬ
ろからは押せ押せと大きな声を出す。おれは邪魔になる生徒の間をくぐり抜けて、曲がり角
すこ　　で　　とき　　たか　　するど　　ごうれい　　きこ　　おも
へもう少いで出ようとした時に、前へ！ と云う高く鋭い号令が聞えたと思ったら師範学
しゆくしゆく　　こうしん　　はじ　　さき　　あらそ　　おりあい　　そうい
校の方は肅肅として行進を始めた。先を争った衝突は、折合がついたには相違ないが、
いっぽ　　ゆず　　しかく　　うえ
つまり中学校が一步を譲ったのである。資格から云うと師範学校の方が上だそうだ。

祝勝の式はすこぶる簡単なものであった。旅団長が祝詞を読む、知事が祝詞を読む、参列者が万歳を唱える。それでおしまいだ。余興は午後にあると云う話だから、ひとまず下宿へ帰って、こないだじゅうから、気に掛けていた、清への返事をかきかけた。今度はもっと詳しく書いてくれとの注文だから、なるべく念入に認めなくっちゃならない。しかしいざとなつて、半切を取り上げると、書く事はたくさんあるが、何から書き出していいか、わからない。あれにしようか、あれは面倒臭い。これにしようか、これはつまらない。何か、すらすらと出て、骨が折れなくって、そうして清が面白いようなものはないかしらん、と考えてみると、そんな注文通りの事件は一つもなさそうだ。おれは墨を磨って、筆をしめして、巻紙を睨めて、――巻紙を睨めて、筆をしめして、墨を磨って――同じ所作を同じように何返も繰り返したあと、おれには、とても手紙は書けるものではないと、諦めて硯の蓋をしてしまった。手紙なんぞをかくのは面倒臭い。やっぱり東京まで出掛けて行って、逢って話をするのが簡便だ。清の心配は察しないでもないが、清の注文通りの手紙を書くのはさんなのか たんじき くる 三七日の断食よりも苦しい。

おれは筆と巻紙を抛り出して、ごろりと転がって肱枕をして庭の方を眺めてみたが、やっぱり清の事が気にかかる。その時おれはこう思った。こうして遠くへ来てまで、清の身の上を案じていてやりさえすれば、おれの真心は清に通じるに違いない。通じさえすれば手紙なんぞやる必要はない。やらなければ無事で暮してると思ってるだろう。たよりは死んだ時か病気の時か、何か事の起った時にやりさえすればいい訳だ。

庭は十坪ほどの平庭で、これという植木もない。ただ一本の蜜柑があって、塀のそとから、目標になるほど高い。おれはうちへ帰ると、いつでもこの蜜柑を眺める。東京を出た事のないものには蜜柑の生っているところはすこぶる珍しいものだ。あの青い実がだんだん熟してきて、黄色になるんだろうが、定めて奇麗だろう。今でももう半分色の変ったのがある。婆さんに聞いてみると、すこぶる水気の多い、旨い蜜柑だそうだ。今に熟たら、たと召し上がれと云ったから、毎日少しずつ食ってやろう。もう三週間もしたら、充分食えるだろう。まさか三週間以内にここを去る事もなからう。

おれが蜜柑の事を考えているところへ、偶然山嵐が話しにやって来た。今日は祝勝会だから、君といっしょにご馳走を食おうと思って牛肉を買って来たと、竹の皮の包を袂

から引きずり出して、座敷の真中へ抛り出した。おれは下宿で芋責豆腐責になってる上、蕎麦屋行き、団子屋行きを禁じられてる際だから、そいつは結構だと、すぐ婆さんから鍋と砂糖をかり込んで、煮方に取りかかった。

山嵐は無暗に牛肉を頬張りながら、君あの赤シャツが芸者に馴染のある事を知ってるかと聞くから、知ってるとも、この間うらなりの送別会の時に来た一人がそうだろうと云ったら、そうだ僕はこの頃ようやく勘づいたのに、君はなかなか敏捷だと大いにほめた。

「あいつは、ふた言目には品性だの、精神的娯楽だのと云う癖に、裏へ廻って、芸者と関係なんかつけとる、怪しからん奴だ。それもほかの人が遊ぶのを寛容するならいいが、君が蕎麦屋へ行ったり、団子屋へはいるのさえ取締上害になると云って、校長の口を通して注意を加えたじゃないか」

「うん、あの野郎の考えじゃ芸者買は精神的娯楽で、天麩羅や、団子は物理的娯楽なんだろう。精神的娯楽なら、もっと大べらにやるがいい。何だあの様は。馴染の芸者がはいってくる、入れ代りに席をはずして、逃げるなんて、どこまでも人を胡魔化す気だから気に食わない。そうして人が攻撃すると、僕は知らないとか、露西亞文学だとか、俳句が新体詩の兄弟分だとか云って、人を烟に捲くつもりなんだ。あんな弱虫は男じゃないよ。全く御殿女中の生れ変りか何かだぜ。ことによると、あいつのおやじは湯島のかげまかもしれない」

「湯島のかげまた何だ」

「何でも男らしくないもんだろう。——君そこのところはまだ煮えていないぜ。そんなのを食うと條虫が湧くぜ」

「そうか、大抵大丈夫だろう。それで赤シャツは人に隠れて、温泉の町の角屋へ行って、芸者と会見するそうだ」

「角屋って、あの宿屋か」

「宿屋兼料理屋さ。だからあいつを一番へこますためには、あいつが芸者をつれて、あすこへはいり込むところを見届けておいて面詰するんだね」

「見届けるって、夜番よばんでもするのかい」

「うん、角屋まえの前に柎屋ますやという宿屋があるだろう。あの表おもて二階にかいをかりて、障子しょうじへ穴あなをあけて、見みているのさ」

「見ているときに来くるかい」

「来るだろう。どうせばんひと晩にしゅうかんじゃいけない。二週間ばかりやるつもりでなくっちゃ」

「随分ずいぶん疲つかれるぜ。僕しあ、おやじの死いっしゅうかんぬとき一週てつや間かんばかり徹夜びょうして看こと病ことした事があるが、あとでおぼんやりして、大よわいに弱よわった事がある」

「少しすこぐらい身からだ体が疲かまれたって構かんわんさ。あんな奸物かんぶつをあのままにほんにしておくと、日本にほんのためにならないから、僕てんが天かわに代ちゅうりくって誅くわ戮くわを加くわえるんだ」

「愉快ゆかいだ。そう事きが極かせいまれば、おれも加勢こんやしてやる。それで今夜こんやから夜番こんやをやるのかい」

「まだ柎屋かけあに懸合だめってないから、今夜だめは駄目だめだ」

「それじゃ、いつから始はじめるつもりだい」

「近々ちかぢかのうちやるさ。いずれ君ほうちに報知ほうちをするから、そうしたら、加勢ほうちしてくれたまえ」

「よろしい、いつでも加勢はかりごとする。僕は計略へたは下手けんかだが、喧嘩けんかとくるとこれでなかなかすばしいぜ」

おれと山嵐やまあらしがしきりに赤あかシャツ退治たいじの計略はかりごとを相談そうだんしていると、宿やどの婆ばあさんでが出て来きて、
学校がっこうの生徒せいとさんが一人ひとり、堀田ほった先生せんせいにお目めにかかりたいてお出いでたぞなもし。今いまお宅たくへ参さんじ
たのじゃが、お留守るすじゃけれ、大方おおかたここじゃろうて捜さがし当てあてお出いでたのじゃがなもしと、
鬨しきいの所ところへ膝ひざを突ついて山嵐へんじの返事まを待まちってる。山嵐げんかんはそうですかと玄関でまで出いて行いったが、
やがて帰かえって来きて、君きみ、生徒しゅくしょうかいが祝勝会よきょうの余興みを見みに行いかないか誘さそいに来きたんだ。今日きょう
は高知こうちから、何なんとか躑おどりおどりをしに、わざわざたにんずのこここまで多人数おお乗り込おおんで来おおているのだから、是非おお
見物けんぶつしろ、めったに見おどられない躑おどりおどだというんだ、君おどもいっしょに行おおって見たおおまえと山嵐おおは大おお

いに乗り気で、おれに同行を勧める。おれは踊なら東京でたくさん見ている。毎年八幡様のお祭りには屋台が町内へ廻ってくるんだから汐酌みでも何でもちゃんと心得ている。土佐っぽの馬鹿踊なんか、見たくもないと思っただけでも、せつかく山嵐が勧めるもんだから、つい行く気になって門へ出た。山嵐を誘いに来たものは誰かと思ったら赤シャツの弟だ。妙な奴が来たもんだ。

会場へはいると、回向院の相撲か本門寺の御会式のように幾旒となく長い旗を所々に植え付けた上に、世界万国の国旗をことごとく借りて来たくらい、縄から縄、綱から綱へ渡しかけて、大きな空が、いつになく賑やかに見える。東の隅に一夜作りの舞台を設けて、ここでいわゆる高知の何とか踊りをやるんだそうだ。舞台を右へ半町ばかりくると葭簀の囲いをして、活花が陳列してある。みんなが感心して眺めているが、一向くだらないものだ。あんなに草や竹を曲げて嬉しがらるなら、背虫の色男や、跛の亭主を持って自慢するがよからう。

舞台とは反対の方面で、しきりに花火を揚げる。花火の中から風船が出た。帝国万歳とかいてある。天主の松の上をふわふわ飛んで営所のなかへ落ちた。次はぼんと音がして、黒い団子が、しょっと秋の空を射抜くように揚がると、それがおれの頭の上で、ぼかりと割れて、青い煙が傘の骨のように開いて、だらだらと空中に流れ込んだ。風船がまた上がった。今度は陸海軍万歳と赤地に白く染め抜いた奴が風に揺られて、温泉の町から、相生村の方へ飛んでいった。大方観音様の境内へでも落ちたろう。

式の時はずいぶんでもなかったが、今度は大変な人出だ。田舎にもこんなに人間が住んでるかとおどろいたぐらいうじゃうじゃしている。利口な顔はあまり見当たらないが、数から云うとたしかに馬鹿に出来ない。そのうち評判の高知の何とか踊りが始まった。踊りというから藤間か何ぞのやる踊りかと早合点していたが、これは大間違いであった。

いかめしい後鉢巻をして、立つ付け袴を穿いた男が十人ばかりずつ、舞台の上に三列に並んで、その三十人がことごとく抜き身を携げているには魂消た。前列と後列の間はわずか一尺五寸ぐらいだらう、左右の間隔はそれより短いとも長くはない。たった一人列を離れて舞台の端に立っているのがあるばかりだ。この仲間外れの男は袴だけはつけているが、後鉢巻は俚約して、抜き身の代わりに、胸へ太鼓を懸けている。太鼓は太神楽の太鼓と同じ物

だ。この男がやがて、いやあ、はああと呑気な声を出して、妙な謡をうたいながら、太鼓を
ぼこぼん、ぼこぼんと叩く。歌の調子は前代未聞の不思議なものだ。三河万歳と普陀洛やの
合併したものと思えば大した間違いにはならない。

歌はすこぶる悠長なもので、夏分の水飴のように、だらしがないが、句切りをとるためにぼ
こぼんを入れるから、のべつのように拍子は取れる。この拍子に応じて三十人の抜き身がび
かびかと光るのだが、これはまたすこぶる迅速なお手際で、拝見していても冷々する。隣り
も後ろも一尺五寸以内に生きた人間が居て、その人間がまた切れる抜き身を自分と同じように
振り舞わすのだから、よほど調子が揃わなければ、同志撃を始めて怪我をする事になる。それ
も動かないで刀だけ前後とか上下とかに振るのなら、まだ危険もないが、三十人が一度に
足踏みをして横を向く時がある。ぐるりと廻る事がある。膝を曲げる事がある。隣りのものが
一秒でも早過ぎるか、遅過ぎれば、自分の鼻は落ちるかも知れない。隣りの頭はそがれる
かも知れない。抜き身の動くのは自由自在だが、その動く範囲は一尺五寸角の柱のうちにか
ぎられた上に、前後左右のものと同方向に同速度にひらめかなければならない。こいつは驚
いた、なかなかもって汐酌や関の戸の及ぶところでない。聞いてみると、これははなはだ
熟練の入るもので容易な事では、こういう風に調子が合わないそうだ。ことにむずかしいの
は、かの万歳節のぼこぼん先生だそうだ。三十人の足の運びも、手の働きも、腰の曲げ方
も、ことごとくこのぼこぼん君の拍子一つで極まるのだそうだ。傍で見ていると、この大將
が一番呑気そうに、いやあ、はああと気楽にうたってるが、その実ははなはだ責任が重くつ
て非常に骨が折れるとは不思議なものだ。

おれと山嵐が感心のあまりこの躑を余念なく見物していると、半町ばかり、向うの方で
急にわっと云う関の声がして、今まで穏やかに諸所を縦覧していた連中が、にわかになみ
を打って、右左りに揺き始める。喧嘩だ喧嘩だと云う声がすると思うと、人の袖を潜り抜け
て来た赤シャツの弟が、先生また喧嘩です、中学の方で、今朝の意趣返しをするんで、ま
た師範の奴と決戦を始めたところです、早く来て下さいと云いながらまた人の波のなかへ潜
り込んでどっかへ行ってしまった。

山嵐は世話の焼ける小僧だまた始めたのか、いい加減にすればいいのにと逃げる人を避けなが
ら一散に駆け出した。見ている訳にも行かないから取り鎮めるつもりだろう。おれは無論の

こと 逃げる気はない。山嵐の踵を踏んであとからすぐ現場へ駆けつけた。喧嘩は今が真最中である。師範の方は五六十人もあろうか、中学はたしかに三割方多い。師範は制服をつけているが、中学は式後大抵は日本服に着換えているから、敵味方はすぐわかる。しかし入り乱れて組んづ、解れつ戦ってるから、どこから、どう手を付けて引き分けていいかわからない。山嵐は困ったなど云う風で、しばらくこの乱雑な有様を眺めていたが、こうなっちゃ仕方がない。巡查がくると面倒だ。飛び込んで分けようと、おれの方を見て云うから、おれは返事もしないで、いきなり、一番喧嘩の烈しそうな所へ躍り込んだ。止せ止せ。そんな乱暴をすると学校の体面に関わる。よさないかと、出るだけの声を出して敵と味方の分界線らしい所を突き貫けようとしたが、なかなかそう旨くは行かない。一二間はいったら、出る事も引く事も出来なくなった。目の前に比較的大きな師範生が、十五六の中学生と組み合っている。止せと云ったら、止さないかと師範生の肩を持って、無理に引き分けようとする途端にだれかわからないが、下からおれの足をすくった。おれは不意を打たれて握った、肩を放して、横に倒れた。堅い靴でおれの背中の上へ乗った奴がある。両手と膝を突いて下から、跳ね起きたら、乗った奴は右の方へころがり落ちた。起き上がって見ると、三間ばかり向うに山嵐の大きな身体が生徒の間に挟まりながら、止せ止せ、喧嘩は止せ止せと揉み返されてるのが見えた。おい到底駄目だと云ってみたが聞えないのか返事もしない。

ひゅうと風を切って飛んで来た石が、いきなりおれの頬骨へ中ったなどと思ったら、後ろからも、背中を棒でどやした奴がある。教師の癖に出ている、打て打てと云う声がある。教師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を抛げろ。と云う声もある。おれは、なに生意気な事をぬかすな、田舎者の癖にと、いきなり、傍に居た師範生の頭を張りつけてやった。石がまたひゅうと来る。今度はおれの五分刈の頭を掠めて後ろの方へ飛んで行った。山嵐はどうなったか見えない。こうなっちゃ仕方がない。始めは喧嘩をとめにはいったんだが、どやされたり、石をなげられたりして、恐れ入って引き下がるうんでれがあるものか。おれを誰だと思ふんだ。身長は小さくても喧嘩の本場で修行を積んだ兄さんだと無茶苦茶に張り飛ばしたり、張り飛ばされたりしていると、やがて巡查だ巡查だ逃げろ逃げろと云う声があった。今まで葛練りの中で泳いでるように身動きも出来なかったのが、急に楽になったと思ったら、敵も味方も一度に引上げてしまった。田舎者でも退却は巧妙だ。クロパトキンより旨いくらいである。

山嵐はどうかと見ると、^{もんつき} 紋付の^{ひとえ} 一重羽織を^{むこ} ずたずたにして、^{はな} 向うの方で^ふ 鼻を拭いている。
^{はなばしら} 鼻柱を^{だいぶしゅ} なぐられて^{けつ} 大分出血したんだそうだ。鼻が^あ ふくれ上がって^{まっか} 真赤になってすこぶる
^{みぐる} 見苦しい。おれは^{かすり} 飛白の^{あわせ} 裕を着ていたから^き 泥だらけになったけれども、山嵐の^{どろ} 羽織^{はおり} ほどな
^{そんがい} 損害はない。しかし^{ほっ} 頬^ち ぺたが^で ぴりぴりしてたまらない。山嵐は大分^{おし} 血が出ている^{おし} ぜと教えてく
れた。

巡査は^{じゅうごろくめい} 十五六名来たのだが、^{せいと} 生徒は^{ほんたい} 反対の^{ほうめん} 方面から退却したので、^{つら} 捕まったのは、おれと山
嵐だけである。おれらは^{せいめい} 姓名を^つ 告げて、^{いちぶしじゅう} 一部始終を^{はな} 話したら、^{けいさつ} ともかくも^こ 警察まで来いと云
うから、警察へ行って、^{しよちょう} 署長^{まえ} の^{てんまつ} 前で^の 事の^{げしゆく} 顛末を^{かえ} 述べて下宿へ帰った。